

2024年3月(37号)

JACET 北海道支部 Newsletter

〈北海道支部事務局〉

〒001-0022 札幌市北区北 22 条西 13 丁目
北海道武蔵女子短期大学 岩田 哲 研究室内

TEL: 011-726-3141 (代表)

Email: iwata [@を入れる] hmjc.ac.jp

URL: <http://www.jacet-hokkaido.org/>

〔巻頭言〕

2023 年度を振り返って

JACET 北海道支部長
松本 広幸

パンデミックも一応の峠を越えたように思われ、会員の皆様におかれましてはこの1年大きなトラブルなく過ごせたのではないかと拝察いたします。2023年度を振り返ると、昨年に続き支部大会、支部総会を対面で開催できたことがまず印象に残っています。やはりオンラインでの開催よりも対面開催の方がいろいろな面でメリットが大きいと感じました。特に講演や発表の合間にあちらこちらで先生方が歓談する様子を見て、その思いを強くしました。会場校をお引き受けいただいた藤女子大学のご厚意に感謝いたします。支部大会の基調講演では、教育大学附属中学校でも教鞭をとられていた群馬県立女子大学の神谷信廣先生にお話いただきました。語学系教員にとって避けては通れない修正フィードバックをテーマに、研究と実践の融合という視座から深く掘り下げたお話を聞くことができました。また関連するシンポジウムなども同時開催されました。第一回研究会では、英語学習の困難を克服する方策、英語コミュニケーションを成功させる要件、多読における内発的動機づけについて発表いただきました。第二回研究会は、例年どおり日本コミュニケーション学会北海道支部と北海道英語教育学会との合同で行われ、スムーズな発話を促す中学校授業の取り組み、およびスウェーデンにおけるコロナ政策の学校への影響についてお話いただきました。

支部活動の変更点について、あらためてお知らせいたします。支部紀要 **Research Bulletin of English Teaching** が2024年(第20巻)から冊子版ではなく支部ホームページにPDF版で掲載され、併せて**J-STAGE**でもオンライン公開されます。昨年度支部総会での承認を受け、今年度この点が大きく変わった点です。

2024年度の支部大会は7月6日(土)に北星学園大学にて対面開催され、基調講演として北海学園大学経済学部教授の柁木貴之先生に「英語教育と国語教育の連携」をテーマにお話を伺います。関連するシンポジウムは「英語の授業はどこまで英語で?~効果的な母語の活用法~」をテーマに実施します。また第63回国際大会は西日本ブロック担当で8月28日(水)から30日(金)まで愛知大学名古屋キャンパスで開催されます。テーマは「高等教育における英語教育の立ち位置を考える」“Positioning ELT in Higher Education”となっています。皆様、奮ってご参加ください。

最後になりますが、近年、支部大会や研究会へ参加される会員数が減少傾向にあります。会員の皆様のご理解、ご協力なくして学会活動は成り立ちませんので、今後ともよろしく願いいたします。

[2023 年度支部総会]

日時：2023 年 6 月 24 日（土）12:20 ～ 12:50

場所：藤女子大学 北 16 条校舎 756 講義室

〈報告〉

1. 支部長報告

2. 幹事報告

2-1. 2022 年度 事業報告

2-2. 2023 年度 事業計画

2-3. 2023 年度 人事

3. 各種委員会報告

4. その他

4.1. 北海道支部紀要 (RBET) の J-STAGE への移行に伴う投稿規程・査読規程の変更について

〈議題〉

1. 2024 年度 事業計画案（承認）

2. 2024 年度 人事案（承認）

3. その他

[2023 年度支部大会]

日時：2023 年 6 月 24 日（土）13:00 ～ 16:35

場所：藤女子大学 北 16 条校舎 756 講義室

【基調講演】

「口頭修正フィードバックのメタ分析を通じた研究と実践の融合」

神谷 信廣（群馬県立女子大学）

即興で文を構築して話す活動では、自然と言語的な間違いが生まれます。その間違いを正そうとする教師や他の学習者の反応が、口頭修正フィードバック (Oral Corrective Feedback; 以下 OCF) です。OCF 研究は、教室内でのティーチングに直接役に立つばかりでなく、理論的にも第二言語習得のメカニズムを解明するのに必要不可欠な分野であり、多くの論文や書物が出版されています。

当然のことながら、個々の研究によって結果にはばらつきが見られます。そこである程度分野が成熟してきた 2000 年代から、OCF のメタ分析 (多くの研究論文の結果をまとめて、俯瞰した傾向を分析する研究手法)を用いた研究論文が出版されるようになってきました。

本発表では、これらの OCF のメタ分析の中から代表的なものをいくつか紹介し、「OCF には効果があるのか」「どのような OCF を使えば良いのか」などの問いに対する答えを導き出します。またそれらの結果を教育現場に生かす可能性について考えていきたいと思ひます。

【実践報告】

「カナダ学生との言語交流活動を通じた授業～試みと授業改善の一例～」

江口 均 (北星学園大学)

本発表では、カナダの大学生との 3 年間の語学交流の中で、オンラインコミュニケーションを工夫し、実践的な英語力を向上させるために実施した授業の改善点を紹介する予定である。発表では、学生間のコミュニケーションの改善を試みた過程、指導方法、活動、役割、そして授業の理念について説明する予定です。

【シンポジウム】

「授業実践から考える効果的なフィードバック」

コーディネーター：笠原 究 (北海道教育大学)

助言者：神谷 信廣 (群馬県立女子大学)

パネリスト：内藤 永 (北海学園大学)

中津川 雅宣 (札幌国際大学)

江口 均 (北星学園大学)

本シンポジウムでは、理論や実践例を通して効果的なフィードバックについてフロアーの参加者も交えて意見交換したいと思ひます。大学で英語を指導する 3 名の方にフィードバックの実践例を紹介して頂いたのち、フロアーの参加者からも意見を頂戴したいと思ひます。尚、基調講演講師の神谷先生にも助言者として登壇していただきます。議論を通じて理論と実践の融合を図れればと思ひます。

〔2023 年度第 1 回支部研究会〕

日時：2023 年 11 月 11 日 (土) 13:00 ~ 14:50

場所：小樽商科大学 2 号館 BL2 教室

【研究発表】

1. 「英語学習の基本要素」

須田 拓基 (昭和大学)

英語の複数形の s は日本語には見られない現象ですが、これを因数分解していくと、この現象の背後には音声面から見れば有声音/無声音、文法面から見れば可算/不可算、あるいは品詞といった

より基本的な要素が関わっていることが分かります。これらの基本要素は複数形の s とは違い、日本語でも様々な現象に関わっています。日本人が英語を学ぶ際に躓く箇所を仔細に観察してみると、英語特有の性質が理解できずに躓いてしまっているというよりはむしろ多くの言語に共通する一般的な性質が理解できずに困難を抱えているのではないかと思われることがあります。本発表では無自覚といわれる母語（日本語）の知識を意識化し、その背後に潜む言語一般の規則や、それらの規則を構成するよりプリミティブな概念・要素に目を向けることによって、英語学習にともなう負荷を軽減することはできないだろうか、という問いに対してひとつの試案を示したいと思います。

2. “Exploring Japanese EFL Learners’ Experiences of Successful and Unsuccessful Communication in English”

Satomi Fujii (Hokkaido University)

EFL learners’ past language communication experiences could influence their present learning attitudes positively and negatively. This study sought to clarify the detailed structures of EFL learners’ successful and unsuccessful communication experiences in relation to their willingness to communicate (WTC) and self-perceived English proficiency. An original scale on learners’ previous communication experiences was developed based on the responses of Japanese EFL learners. The items for successful communication experiences were separated into two factors: “practical English communication experiences” and “positive classroom experiences.” The items for unsuccessful communication experiences also created the two-factor structure and were named: “realizing insufficient English proficiency” and “perplexity in English communication.” The two factors of successful communication experiences had a positive correlation with learners’ present WTC, whereas the two factors of unsuccessful communication experiences negatively correlated with learners’ present WTC. Findings suggest the importance of focusing on learners’ past communication experiences that could contribute to positive learner outcomes.

3. 「多読に於ける内発的動機付け 3 要素から見てきたもの ～2 短大の比較から～」

竹村 雅史（北星学園大学短期大学部）

廣森 友人（明治大学）

授業内で多読を導入して、20 年以上になる。学習者は思いの外、これに自ら取り組む者が多い。これは何故なのか？本発表は道内 2 短大での多読授業でのアンケート調査結果を基に自己決定理論の 3 要素（自律性・有能性・関係性）に焦点を当て、多読と内発的動機付けとの親和性を明らかにするものである。

〔2023 年度第 2 回支部研究会〕

日時：2024 年 3 月 9 日（土）13:30 ～ 16:30

場所：札幌市生涯学習センターちえりあ 2F 研修室 5・6

【研究発表】

「2秒以内に返答する授業をしたら、英会話テストでも2秒以内に返答できるようになる」

加藤 心（土幌町立土幌町中央中学校）

【話題提供】

「スウェーデンにおけるコロナ政策の結末～主に子どもへの影響の観点から～」

渡辺 まどか（スウェーデン研究者）

【参加者意見交換会】

「コロナ禍で変わる子どもの学び～外国語とコミュニケーション課題と～」

〔編集後記：2023年度を終えて〕

ここ1年ほどの間に、Chat型AIの利用が学生の間でも急速に進みつつあることを実感しています。エッセイライティングやプレゼンテーションの課題でその利便性を享受する一方で、出来上がったものが「借りもの」であるという感覚も少なからずあるようで、質疑応答など即興でのやりとりに備えて、「自分で使える英語表現のストックを作ることが大切だ」という認識に結局は回帰していく様子を、興味深く眺めています。

対面授業に戻り、何のために英語を学ぶのか、自身のスキルを高めるためにどのような勉強が必要で、AI技術をどのように活用していくべきかを、教え子たちとじっくり語り合う時間が戻ってきたことを嬉しく思う日々です。(M)